

スペイン語とルーマニア語における前置詞 つき直接目的語について

Objetos directos preposicionales personales en español y en rumano

伊藤 太吾
Taigo ITO

1.0. 話は少し古くなるが、ロマンス語圏における Bartoli (1925, 1945) の「周辺言語古語説」や日本語における柳田国男 (1927) の「方言周圏論」は、発表当時は魅力のある学説であった。今日でも、両者が共通して主張している“周辺部に古い語彙が保存される”ということは全面的に否定はしきれない。しかしながら、革新が常に中央からのみ生じて、波紋が広がるようにそれが周辺に及ぶわけでない、ことを示す事例がないわけではない。例えば、Iordan (1961) や Sala (1967) が指摘するように、音節頭位子音の強化、語中内破子音の弛緩、開音節・閉音節を問わずアクセントのある短母音 E の二重母音化、直接・間接目的語の代名詞による重複、特定の人間が直接目的語になると前置詞 a (スペイン語)・pe (ルーマニア語) が要求される、などラテン語にはない革新的な現象がスペイン語とルーマニア語に共通して現れる。

本稿では、「特定の人間が直接目的語になると前置詞が要求される」[Quiero a María = O iubesc pe Maria] という問題を取り上げ、用いられる前置詞が両言語で異なるものの、必要になった理由とその理由が両言語に共通しているか否かを考えてみたい。

1.1. まず、Quiero a María = O iubesc pe Maria はラテン語では AMO MARIAM と言われ、前置詞 a や pe は現れていないこと、スペイン語の a は AD に由来し、ルーマニア語の pe は PER に由来し、両者の前置詞とも対格支配であることを確認しておきたい。そして、スペイン語やルーマニア語に見られる上記の現象が他のロマンス語や方言に見られないかを Schuchardt (1909), Niculescu (1965), Rohlf s (1971) などによって確認してみると、ポルトガル語 a, カタロニア語 a(n), モロッコのスペイン語方言 per, イタリアの南部方言 a, オック語 (d)a, ad, シシリア方言 (d)a, a, エルバ島方言 a, コルシカ島方言 a, レト・ロマン語 a, サルジニア語 a, といった用法が今日も認められるという。これらの例から、「特定の人間が直接目的語になると要求される前置詞」は、すべての言語においてラテン語の AD か PER に由来することが分かる。そして、今問題にしている現象が現れるのは、Bartoli (1925) の言葉を借りれば、標準フランス語や標準イタリア語の用いられる、いわゆるローマニアの中央部ではなくて周辺部であることも明らかになった。

1.2. 今我々が扱っている問題は、ロマンス語学において古典的なもので、古くから多くの学説が展開されてきている。

1.2. スペイン語の前置詞 a の特殊用法が現れるようになった理由を説明する学説を紹介・検討してみよう。

1.2.1. Diez (1836~40) は、スペイン語の前置詞 a の出現理由を、統辞的曖昧さを避けるため、すなわち、主語と目的語を明確に区別するためである、とした最初の学者である。少し遅れて同じ主旨の意見を出したのが

Brauns (1910) と Lenz (1935) である。Brauns (1910) は「人間の固有名詞以上に人間的で限定されたものはない」とし、「限定された人間」が主語になりやすいことを感じた最初の学者であろう。

1.2.2. Hills (1920) と Fernández Ramírez (1937) も、直接目的語が「人間」のとき統辞的曖昧さ避ける必要上、前置詞が必要になったとしているが、「限定された」とも「特定な」とも言っていない。

1.2.3. 直接目的語が「無生物」でなく「生物」のときに前置詞 *a* が要求されるとしたのは Meyer-Lübke (1890) である。文の主語になる傾向が強いのは「生物」であることからの発想であるが、Diez (1836~40) の説と本質的に変わらないと言えよう。

1.2.4. 主に Cantar de Mio Cid (1140) を考察し、「過激な行為を表す動詞の直接目的語に前置詞 *a* が必要である」としたのは Spitzer (1928) である。彼は、ルーマニア語に関する Pușcariu (1921~22) の「主語と目的語を区別するため」という説に満足せずに、「“支配する”などといった過激な行為の目的語を強調するため」とであると言う。

1.2.5. Hatcher (1942) はスペイン語とルーマニア語は別々に考える必要があるとし、スペイン語の前置詞 *a* の出現に関しては、Cantar de Mio Cid を分析してみると、「攻撃」を表す動詞とよりも「尊敬」を表す動詞とともに用いられる傾向がある」としている。すなわち、「尊敬」を表す目的語を際立たすための用法、つまり *ceremonious nuance* をともなった動詞の目的語を強調する用法であると言う。

1.2.6. Meier (1948) は、スペイン語のみならずルーマニア語をも含むこの現象を説明すべく、次のように3つの異なる段階を想定している。

第1段階：1人称単数と2人称単数の弱形代名詞の対格と与格が殆んどの言語で同形であるがために、強形の対格が与格と混同されて前置詞 *a* (<AD) が用いられるようになった、と言う。しかしながら、この説がルーマニア語に適用され得ないことは、対格と与格が同形でなく、前置詞 *pe* が与格の機能を果し得ないことで明らかである。

第2段階：ポルトガル語、カタロニア語、レト・ロマン語、フランス語の諸方言、オック語に認められる現象であるが、固有名詞と人間を表す普通名詞が直接目的語になるときに前置詞 *a* がつく。代名詞と固有名詞に普通名詞が併置されたとき、類推的に普通名詞にも *a* が用いられると言う。比較級の対象が、例えば *te quiero más que a nadie* “誰よりも君を愛す”の例のように、直接目的語のとき、機能を明らかにする必要上、*a* が用いられる。

第3段階：スペイン語とルーマニア語で行われている、特定な人間が直接目的語のときに前置詞 *a*, *pe* が必要になる現代語の段階。しかしながら、この第3段階の用法が早くからスペイン語に現われていることを、どう説明するのであろうか。

Meier とほぼ同じ意見なのは Ramsden (1961) である。Ramsden (1961) は、前置詞強形の有する *exaltative use* がひとつだけ確立するや、名詞にもその用法が伝播したと考えた。

1.2.7. Reichenkron (1951) は上記の諸説とは別の視点から問題を論じている。韻文の Cantar de Mio Cid を考察し、リズムの面で動詞と目的語を区別する必要から前置詞 *a* の用法が生じたと言う。すなわち、例えば *mató el perro* “彼はその犬を殺した”の場合、定冠詞にはアクセントが落ちないのでリズムが強弱強弱と理想的であるのに対して、固有名詞の場合、例えば *mató Búcar* “彼はブカルを殺した”の場合、リズムは弱強強弱となり理想的でない。その結果、前置詞 *a* が目的語に前置されるようになったと言う。さらに、ラテン語の二重対格の用法がスペイン語の前置詞 *a* の出現に拍車をかけ、前置詞 *a* の持つ *autovaloración* “自己評価”能力ゆ

えに、直接目的語の前で用いられるようになったと言う。そして、行為者を示す奪格支配の前置詞 *ab* が直接目的語と解釈されて、前置詞 *a* の用法が拡大したと言う：Vos vedes a Munno Salido así me desondrar “そのようにしてムニョ・サリードが私を侮辱しているのがお分りでしょう”。

リズムに関するこの説は他の学者から出されていない独特のものであるが、残念ながら極く限られた韻文にしか適用できないという欠点がある。

1.2.8. Molho (1958) は、スペイン語における前置詞 *a* の出現は *animé* (生物) と *inanimé* (無生物) を区別し、主語と目的語を区別するためであると言う。

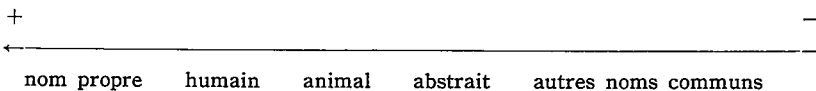
1.2.9. Vossler (1962) も *animado* (生物) と *inanimado* (無生物) を区別し、主語と目的語との関係を明らかにするためであるとして、次のように述べている：“Otra característica lingüística del español es la diferencia sintáctica que se hace entre objetos animados e inanimados, o para decirlo más exactamente, entre la relación animada e inanimada del sujeto con el objeto. Por ejemplo: *querer a un criado = estimarle*, pero *querer un criado = desear o buscar un criado*.....El español considera el agua ante la que siente temor de distinta manera que el agua contenida en un cántaro, según lo cual hace una diferenciación sintáctica entre *temer al agua* y *buscar agua*, de igual manera que para el niño es algo esencialmente distinta la silla contra la que se vuelve, después de haberse dado un golpe con ello, y que le sirve de asiento.”

1.2.10. Fish (1967) は、SVO という語順のときには前置詞 *a* は特別な機能を果し得ず、倒置されたとき直接目的語を明示するために用いられたとした最初の学者である。

1.2.11. Pottier (1968) は、Niculescu (1959) のルーマニア語の前置詞 *pe* に関する意見を参考にしたものの、スペイン語の特定の人間が直接目的語になるときに前置詞 *a* が必要であるというとき、その人間が単数のときの方が複数のときよりも前置詞 *a* が多用されることに注目した最初の学者である。また Pottier (1968) は、動詞の有する意味の差 (有効性の度合い) と目的語との結びつきの程度によって前置詞の頻度が異なることに注目した。Pottier (1968) は、動詞の有効性を、

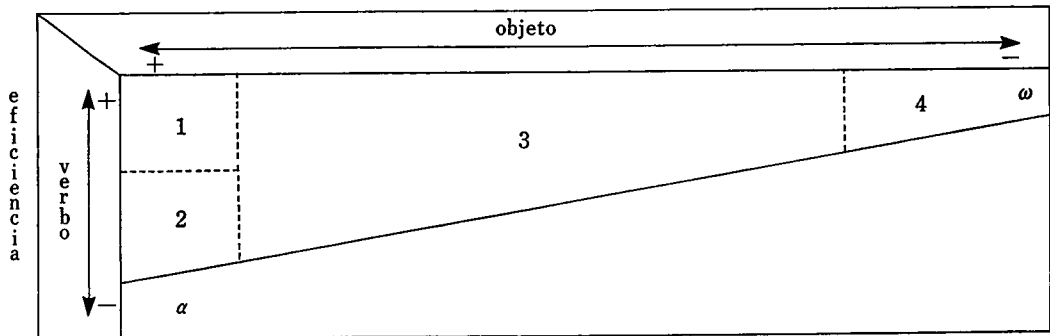


のように図式化できるとしているが、これは Spitzer (1928) や Hatcher (1942) の説の延長線上にあるものである。さらに Pottier (1968) は、目的語の意味軸を次のように図式化している：



そして、Pottier (1968) は次のような図式化をも試みている [Hoyos (1982) による]：

singularización
animación



α = ausencia de “a” ante objetos muy animados y muy determinados.

ω = presencia de “a” ante objetos inanimados genéricos.

1 = máxima singularización del objeto y máxima eficiencia del verbo.

2 = objeto bien singularizado y verbo con eficiencia variable.

3 = objeto variable y verbo con eficiencia variable.

4 = objeto inanimado y verbo variable.

この図式で言う singularización は Niculescu (1959) の言う individualitate とほぼ同じものを指すと思われる。現代語の a の用法を説明するものとしては、良い図式である。

1.2.12. Schuchardt (1982~83) は、オクタビオ・パスの *Las perlas del olmo* の中に登上する女性で、軽蔑されている場合、直接目的語であっても前置詞 a が用いられないという、注目に価する報告をしている。これは、完全に「物扱い」されている証拠である。

1.2.13. Pensado (1985) は、前置詞 a は対格支配ながら、機能的には与格（間接目的語）との類似から多用され始めたとしている。また、倒置文の場合には、topicalización（話題化）の機能を与えるための前置詞 a が機能していたのは彼女が最初であり、的を得た説であると思われる。ラテン語の (QUOD ATTINET) AD は、当然のことながら対格を要求し、nominativus pendens と同様に topicalización の機能、すなわち、話題を変える役割を有していたことは良く知られているが、古スペイン語の段階でも「a+名詞」は主語・目的語の別にかかわらず「話題化」機能を有していたと言う。スペイン語では、名詞がラテン語の対格に由来し、それが主語になったり目的語になったりすることからも分かるように、文頭での「a+名詞・代名詞」を用いた「話題化機能」は自然である。

1.2.14. Lapesa (1964) は、“no hay límites tajantes para el uso u omisión de la a: los decide una sutil casuística según los matices significativos del verbo, el grado o carácter de la determinación del nombre y factores psicológicos diversos” と言って決論を下してはいないが、前置詞 a の特殊用法は、対格と与格の混同、leísmo や laísmo による 3 人称弱形代名詞の混同による与格の対格への適用から生じたと考えているようだ。

1.2.15. García Martín (1988) は、中世スペイン語において人間でない直接目的語に前置詞 a がつく場合と

して、

a) ラテン語で与格を要求する動詞, b) ラテン語で二重対格を要求する動詞, の2つのケースが多いと言う。これらの2つのケースの場合, 目的語が人間でなくても意味的に限定されていれば〔当然, 形態的にも定冠詞・所有形容詞・指示形容詞などによって限定されている〕。前置詞 a がついているというから, 目的語が人間であれば, なおさら前置詞 a が用いられてもおかしくないと言えよう。

1.2.16. Folgar (1988) は, 13世紀の歴史書 *Primera Crónica General de España* に頻出する *matar en ellos* といった類の文を調べ, *assenorear, besar, colpar, dar (golpear の意), derribar, destroyr, dezir, dolar, endereçar, estudiar, fazer, ferir, heredar, leer, matar, morder, prender, roer, tanner* などが従える「前置詞 en+生物を表す複数形名詞」の en は *Cano Aguilar* の言う *claro valor locativo* とは異り, *acción en desarrollo* または *Aktionsart durativa* を表すと言う。本稿の問題とは少々異なるが, 中世においては今日では見られない用法があったことが分かる。と同時に, *Spitzer (1928)* や *Hatcher (1942)* の意見を再考したくなるような意見である。前置詞 a は動詞の有する意味を強めたり, 幾分変えたりする役割があったのであろう。

2.1. 次に, ルーマニア語に前置詞 pe が現れるようになった理由・年代を説明する学説を紹介・検討してみよう。

2.1.1. *Stinghe (1896~97)* によると, ルーマニア語の前置詞 pe の特殊用法は16世紀の翻訳文のみに見られる現象であると言う。そして, *Candrea (1916)* は, この現象は1574年以前にも現れ, 今日のアロムン方言やメグレノ・ロムン方言にも認められると言う。しかし, *Puşcariu (1921~22)* と *Dimitrescu (1960)* は, この現象はドナウ河以南の3方言には認められない新しいものであると言うなど, 初出年代に関しては定説はないが, 16世紀後半に *pre (>pe)* という古形で出現していることは確かである。

2.1.2. *Kalepky (1913)* は, スペイン語の a とルーマニア語の pe は一定の自動詞との関係において場所を明確に表す *locativo (処格)* の機能に由来するという意見である。

2.1.3. *Puşcariu (1921~22)* は, 主語と目的語を明確に区別するために発生した現象であると言う。また, *învinge (征服する)* や *ciştiga o victorie împotriva cuiva (誰かから勝利を得る)* といった特殊な動詞とともに用いられ始めたと言う。この考えは幾分修正をほどこされて, *Spitzer (1928)* や *Hatcher (1942)* によって受け継がれている。

2.1.4. *Hatcher (1942)* は, ルーマニア語の pe とスペイン語の a は別々に考える必要があるとしている。その理由として, スペイン語の a が方向を示すのに用いられていたのに対して, ルーマニア語の pe は“支配する”という意味を有する自動詞とともに用いられ始め, 次に“征服する”・“攻撃する”などといった「敵対」を表す動詞とともに用いられ始めた, という2つの事柄をあげている。しかしながら我々は, a (<AD) と pe (<PER) に共通した「方向を示す機能」を見逃すわけにはいかない。

2.1.5. *Nandriş (1951~52)* は, 主語と目的語を区別するための, ブルガリア語の前置詞 na を用いた文語表現からの借用であると言う。

2.1.6. *Seidel (1958)* もブルガリア語の影響によって pe の特殊な用法が発生したと言う。しかし, 16世紀のルーマニア語にこの用例が多くないことからすると, ブルガリア語影響説は疑しくなる。

2.1.7. *Niculescu (1959)* は, pe が必要な直接目的語は人間の *individualitate* “個性”すなわち「1人で特定であること」に着目した最初の学者であった。*individualitate* は最も主語になる可能性のある特性であること

から、「主語と目的語を明確に区別する必要から誕生した用法である」と Niculescu (1959) は考えていると判断できる。そして、Guțu-Romalo (1969) も、「本質的には主語と目的語を明確に区別するために発生した用法である」と断言している。

2.1.8. Onu (1959) は、「主語+他動詞+直接目的語」のいろいろな組み合わせの可能性を検討した結果、語順が自由である〔実はこれは俗説である、〕がために、前置詞 *pe* が必要になったと、次のように言っている：「目的語が事物で、主語が1・2人称の場合は、どちらが主語でどちらが目的語であるかの混同が起きる恐れは全くないのであるが、両方とも事物の場合や一方が3人称の人間で他方が生物の場合、どちらが主語でどちらが目的語かの区別がつきにくい。特に両者が生物で倒置が行われた場合に、統辞的曖昧さを避けるために前置詞 *pe* を用いる。」

2.1.9. 上の Onu (1959) の意見は、Pottier (1960) の言う *singularisé*—*non-singularisé* の対立によって前置詞 *pe* の特殊用法が誕生したという意見によって補強されこそすれ、拒絶されるような意見ではない。

2.1.10. Coteanu (1969) は、初期の共通ルーマニア語の時代では、*Învățătorul cheamă băiat* よりも *Învățătorul cheamă băiatul* の方が頻度が高かったと言う。しかし、この文では「先生」が主語なのか「少年」が主語なのか明確でない。そこで *Învățătorul îl cheamă băiatul* もしくは *Învățătorul cheamă-l băiatul* という構文がアロムン方言やダキア・ルーマニア語に生まれた。そして、主語と目的語をより明確に表すために、最後の構文から *Învățătorul îl cheamă pe băiatul* という、現代語で最も一般的な構文が生じたとしている。

3.1. 上記の諸説を分類してみると、スペイン語の前置詞 *a*、ルーマニア語の前置詞 *pe* が多用され、それが規範となるに至った理由は、a) 統辞的理由、b) 意味的理由、c) 文体(目的語の特性)的理由、d) 話題化、の4つに分類できるであろう。それらの中で、a) 統辞的理由、すなわち、「主語と目的語を区別する必要から」とした学説が最も多い：Diez (1836~40), Brauns (1910), Hills (1920), Pușcariu (1921~22), Lenz (1935), Fernández Ramírez (1937), Meier (1948), Onu (1959), Coteanu (1969) など。b) 意味的理由によるとした説の多くは、「直接目的語が特定化された(単数の)人間のときに前置詞 *a*, *pe* が必要になった」としている。この説の代表者は Niculescu (1959) や Pottier (1960, 1968) である。しかし、「直接目的語が *animé* (生物) か *inanimé* (無生物) かの区別の必要がある」としたのは Meyer-Lübke (1890), Molho (1958), Pottier (1960), Vossler (1962) などである。Pottier は2カ所に名前が現れるが、その学説に矛盾があるのではなく、この問題が本質的に細分化しにくく、どこかである部分が重複するという性格を有するためである。c) 「文体的理由による」としたのは Spitzer (1928), Hatcher (1942), Schuchardt (1982~3) である。最後に、d) 「話題化のために前置詞の特殊用法が生まれた」としたのは唯1人 Pensado (1985) である。Nandriș (1951~52) と Seidel (1958) は「ルーマニア語の *pe* 出現はブルガリア語の影響による」としたが、モロッコのスペイン語方言に現れる *per* がブルガリア語の影響では説明できないこともあり、排除されねばならない。他の説はすべてラテン語に由来する自国語内の派生であるとしているのであるが、これらの説はお互に矛盾するものでないどころか、むしろお互に補完し合うべきもの、お互いからみ合っているものであると考えられる。

上記の説で最も重きをなすのは、a) 「統辞的理由」である。特定化された個人(これには当然「生物」が含まれる)が主語になる可能性が一番高いことから、語順が SVO のときでも主語と直接目的語を区別する必要上、特に両者が3人称単数の場合に、前置詞の必要性が誕生した。その過程において、与格支配と対格支配の動詞の混同、与格と対格の代名詞の重複表現のときの弱形代名詞の格の混同、他動詞と自動詞の混同なども考慮に入れ

る必要がある。このことに関して、Coresi (1577) の *Psaltirea slavo-română* に、次のような注目に価する例がある。

După miluirea ta caută spre mine (285 頁),

Caută spre mine (366 頁)。

たった2例とは言うものの、*cauta pe cineva* (誰かを探す) [←誰かの方を見る] という表現で、本来は方向(私の方を、に)を表す自動詞とともに用いられた例である。スペイン語に関しては、1336年の *Conde Lucanor* の第35話に

...cató a todas partes...desque ovo catado a cada parte などという *catar* の自動詞としての用法があるかと思えば、

Catad que no me despierte cras ninguno といった *catar* の他動詞としての例もある。

スペイン語でもルーマニア語でも、上の例に見るような、自動詞と他動詞の混用(あるいは、実際の運用者にとって区別不能のことであったかも知れない)が一種の引金になった可能性も否定できないであろう。

さらに、Spitzer (1928) や Hatcher (1942) の言うような、特殊な意味を有する動詞による文体がある程度影響したであろう。そしてまた、直接目的語が動詞に前置された倒置文における「直接目的語の話題化」機能も、比較的語順にゆとりのある言語であるスペイン語とルーマニア語に現れたのであろう。

スペイン語に関して、Juan de Valdés (1536) は *Diálogo de la lengua* の中で、次のように述べている：“En este error caen especialmente los que quitan una *a* que se deve poner delante de algunos acusativos, y assí, aviendo de dezir *el varón prudente ama a la justicia*, dicen *ama la justicia*, la qual manera de hablar, como véis, puede tener dos entendimientos: o que el varón prudente ame a la justicia, o que la justicia ame al varón prudente, porque sin la *a* parece que stán todos los hombres en un mesmo caso.”

justicia は明らかに「人間」ではないが、主語も3人称単数なので、主語と目的語との混同を避けるために *a* が用いられているものである。

Cantar de Mio Cid (1140) における「特定な人間」と *a* との関係に関して、今日のような規準があったとは我々には思えない。

目的語が単数の人の固有名詞(の類)で、SVOの語順のケースとして、

los braços abiertos reçibe a Minaya (488)

van buscar a Valençia a mio Çid don Rodrigo (1628)

Yo eché de tierra al buen Campeador (1890)

e matamos a aquel rey Búcar, traydor provado (2523)

víolos el rey e coñosció a Muño Gustioz (2932)

enbair le cuydan a mio Çid el Campeador (3011)

e iva reçebir al que eu buen ora naçió (3021)

Quando lo vieron entrar al que en buen ora naçió (3107)

などの例が見られる。

OV(S)の語順の場合、目的語が単数の場合は、もとより複数の場合でも、*a* が現れる例が多い。

A los de Valençia escarmentados los han (1170)

Minaya a doña Ximena e a sus hijas que ha, / e a las otras dueñas que las sirven delant, / el bueno de Minaya pensólas de adobar, / de los mejores guarnimientos que en Burgos pudo fallar (1424~1427)

a Minaya e a las dueñas, i Dios cómo las ondrava! (1554)

A la madre e a las hijas bien las abraçava (1599)

a sos vassallos, víolos aderredor (3341)

これらは topicalización の例であるが、韻文の場合、動詞を末尾にもってくる方が脚韻を合わせやすいという利点があることに注目したい。

しかし、次のような例はどのように解釈したら良いであろうか。

reciba a míos yernos commo elle pudier mejor; / dil que enbió mis hijas a tierras de Carrión (2637~8)

つまり、2637には a が現れ、次の2638には現れていないのである。さらに、

ca yo casé sus hijas con ifantes de Carrión (2956)

Dios salve a nuestros amigos e a vos más, señor! (3038)

Yo las caso a vuestras hijas con vuestro amor (2099)

Verán a sus esposas, a don Elvira e a doña Sol (2180)

のような不統一の例がある。

また、今日では a が用いられないのに、用いられている例もある。

abatió a siete e a quatro matava (2395)

dos días atendieron a ifantes de Carrión (3537)

3537では ifantes の前に定冠詞 los が必要と思われるが、音節数の関係もあって省略されているのであろう。しかし、a があることによって何が目的語であるかが良く分かる例である。2395 の例では逆に音節数の関係で a が挿入されたのであろう。

中世初期には統一的規準を欠きながら、いろいろな試みがなされていたものと思われる。

Bolaño e Isla (1959) は、「17世紀のロペ・デ・ベガやケベドにおいても前置詞 a の使用は、一般化していない」と言う。上に考察した結果から、Lapesa (1964) の言うように、スペイン語の前置詞 a の特殊用法にははっきりとした規準がなく、永年かかって出来つつあるもので、従って、その起源が何か1つであると特定化できないのではないかと考えられる。

「特定な人間が直接目的語になると必要になる前置詞」は、スペイン語とルーマニア語ではそれぞれ a(<AD) と pe(<PER) と異なるが、共通点として、両者がローマニアの周辺言語であるということと、それらの前置詞が共に単音節で対格支配であり「方向」を示す機能を有していた、ということではできよう。

Bibliografía

Bartoli, M 1925: *Introduzione alla Neolinguistica*, Genova-Firenze.

Bartoli, M 1945: *Saggi di Linguistica Spaziale*, Torino.

Bolaño e Isla, A 1959: *Manual de historia de la lengua española*, México.

Brauns, J 1910: *Zum präpositionales Akkuzativ im Spanischen*, ASNS, 7.

Candrea, I 1916: *Psaltirea Scheiană*, București.

Coteanu, I 1969: *Morfologia numelui în protoromână*, București.

Diez, F 1836-40: *Grammatik der romanischen Sprachen*, Bonn.

- Dimitrescu, F 1960: Despre *pre* la acuzativ în limba textelor traduse din slava în sec. al XVI-lea, SCL 2.
- Fernández Ramirez, S 1937: Gramática española, Madrid.
- Fish, G 1967: "A" with Spanish direct object, Hispania 50.
- Folgar, C 1988: El complemento preposicional del tipo «matar en ellos» en la Primera Crónica General de España, Actas del I Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española, Madrid.
- García Martín, J.M. 1988: Objetos directos preposicionales no personales en la prosa castellana de los siglos XIII y XIV, Madrid.
- Guțu Romalo, V 1969: În legătură cu construcția prepozițională a complementului direct în limba română, LR 18.
- Hatcher, A 1942: The use of *a* as a designation of the personal accusative in Spanish, Modern Language Notes, 71.
- Hills, E 1920: The accusative "A", Hispania, 3.
- Iordan, I 1959: Quelques parallèles syntactiques romanes, Bucarest.
- Kalepky, T 1913: "Präpositionale Passivobjekte" im Spanischen, Portugiesischen und Rumänischen, ZRPh, 37.
- Lapesa, R 1964: Historia de la lengua española, Madrid.
- Lenz, R 1935: La oración y sus partes, Madrid.
- Meier, H 1948: O problema do acusativo preposicional nas línguas românicas, Lisboa.
- Meyer-Lübke, W 1890: Grammatik der Romanischen Sprachen, Leipzig.
- Molho, M 1958: La question de l'objet en espagnol, Vox Romanica, 18.
- Nandriș, G 1951-52: The development and structure of Romanian, The Slavonic Review, 30.
- Niculescu, A 1965: Sur l'objet direct prépositionnel dans les langues romanes, Bucarest.
- Onu, L 1959: L'origine de l'accusatif roumain avec p(r)e, Bucarest.
- Pensado, C 1985: La creación del objeto directo preposicional y la flexión de los pronombres personales en las lenguas románicas, RRL, 30.
- Pottier, B 1960: L'objet direct prepositionnel, SCL, 11.
- Pottier, B 1968: L'emploi de la préposition *A* devant l'objet en espagnol, BSLP, 1.
- Pușcariu, S 1921-22: Despre *pre* la acuzativ, Dacoromania, 2.
- Ramsden, H 1961: The use of A + personal pronoun in Old Spanish, BHS, 38.
- Reichenkrom, G 1951: Das präpositionale Akkusativ-Objekt in ältesten Spanischen, RF, 63.
- Rohlf, G 1971: Autour de l'accusatif prépositionnel dans les langues romanes, RLIR, 35.
- Sala, M 1967: El rumano y el español, áreas laterales de la Romania, Bucarest.
- Schuchardt, B 1982-83: Contextos del objeto directo en castellano, BF, 32.
- Schuchardt, D 1909: Die Lingua franca, ZfRPh, 33.
- Seidel, E 1958: Elemente sintactice slave în limba română, București.
- Spitzer, L 1928: Rum. *p(re)*, Span. *a* vor personallichem Akkusativ-Objekt, ZRPh, 67.
- Stinghe, S 1896-97: Die Anwendung von *per* als Akkusativzeichen, JIRS, 3.
- Vossler, K 1962: Algunos caracteres de la cultura española, Madrid.